

## “The Sense of My Continuity”

——エドマンド・ウィルソン「60歳になった著者」について

中 村 紘 一

### 1.

60歳を迎えての2つの心境——そして、タルコットヴィルの〈古い石造りの家〉

エドマンド・ウィルソンの作品に、「近ごろ、感じるようになったのは、アメリカ人として自分がどうやら18世紀の人間である——ともかく19世紀初頭からそれほど進歩していない人間である——ということだ」の文で始まる珠玉のエッセイがある。これは1956年、ウィルソンが「60歳になった著者」(“The Author at Sixty”)と題して発表したもので、エッセイ集 *A Piece of My Mind — Reflections at Sixty* (1956) ①の最終章に収められている。この一文に続いて、ウィルソンは「運転はしないし、車で旅行するのも好きでない——進歩したのはせいぜい自転車止まりだ」と述べ、以後1頁足らずのパラグラフで、「ラジオも我慢できない」、「テレビもめったに見ない」、「映画を観にいくこともほとんどない」、行動範囲は決まっておき、「昔は取材に出かけていった時事問題にもはや煩わされたくない」し、「若いアメリカ作家の動向を追いかけることは」しない、と〈ないないづくし〉で、このところの生活ぶりを披露する。

なるほど、このような日常を過ごすことは、現代文明からかけ離れた生き方、少なくとも20世紀のそれからは随分かけ離れた人間の生き方であるに違いない。そうなった原因、とりわけ、映画や時事問題に対する好奇心や外に出かけていく行動力がなくなった原因は、もちろん、彼が「60歳になった」

こと、つまり老いを迎えたせいである。「さまざまな興味や女性や家庭を経験してきた」ウィルソンもついに年貢の納め時が来たことを自覚しなければならなくなった。そのような現実客観的に見て決してうれしくないはずである。

しかし、ウィルソンはその現実に悲観的になるかと言えば、必ずしもそうではない。彼は「若いアメリカ作家の動向を追いかけることは」できないけれども、そのぶん「まだ読んでいない古典を読み通す」時間をもちたいと念じる。老いからくる行動力の衰えを逆手にとって、興味の対象を、居ながらにしてでもできる、本質的なものだけに絞り込んだ知的活動に専心したいという。パラグラフ最後を「時代後れの心境に心地よく近づいている」(Old fogeyism is comfortably closing in.) の文で締めくくるウィルソンは、「心地よく」(comfortably) という言葉を加えることによって、老いの心境を単なる開き直りではなく、むしろ積極的に享受したいと言っているのだ。②

この「時代後れの心境」(old fogeyism) に加えて、ウィルソンは、2つ目の短いパラグラフでは、60歳を迎えてのもう1つの心境を述べている。

合衆国で生活することは分裂 (disruption)、挫折、破局、消耗にいたることが多い。若いころはわたしもそのような運命にしばしば怯えたものだ。が、現在、生まれて61年目を迎え、たいそう満足していることの一つは、自分が継続しているという意識 (the sense of my continuity) である。  
(211-2)

現在、ウィルソンは1年を2つに分けて、「マサチューセッツ州ウェルブリートとニューヨーク州タルコットヴィルという二つの古い田舎町で」交互に生活しているが、後者の町では、幼いころに過ごしたことのある〈古い石造りの家〉(the Old Stone House) を住まいとしている。そこの部屋の一室には13歳のときにパリのノートルダム大聖堂でみやげに買ったガーゴイルとそれより前にセントローレンス川の旅でやはりみやげに買った小鳥の縫いぐるみが残されていた。

それらがまだここにこうしてあるのを見て、自分がさまざまな興味や女性や家庭を経験してきたにもかかわらず、ノートルダム大聖堂の陰しい螺旋階段を昇ったのと、あるいは、(セントローレンス川の) サウザンド・アイランドを通り抜けるあの旅をしたのと正真正銘の同一人物 (authentically the same individual) であると認めることができるのを知って、安心すると同時に驚きもするのである。(212)

ウィルソンは、生まれてこの方、海外旅行の懐かしい思い出のある少年期やその後の波乱に満ちた青壮年期を経て60年の生涯を、肉体的にも精神的にも思うことがあったにせよ、よくぞ生き延びてきたという思いに到って、改めてありがたくも〈自分が継続しているという意識〉に打たれているのである。

3つ目のパラグラフもやはり短いもので、ウィルソンは *A Piece of My Mind* の執筆の場所がタルコットヴィルにあるその〈古い石造りの家〉であること、そして、それが「かつては私の一族が、現在はわたしが所有していて、18世紀の終わりにこの地方の石灰岩で建てられた」ものであることをごく簡単に紹介する。

## エッセイのほとんどを占める両親についての、とりわけ、父親についての記述

しかし、以上3つのパラグラフで60歳を迎えた心境を短く述べた後、奇妙なことに、ウィルソンは、何の前触れもなく突如として、自分の両親について、とりわけ、父親について語り始めるのである。しかも、それを何頁にもわたって延々と続ける。このエッセイは全体で28頁からなる短いものであるが、そのうち自分のことを語っているのは最初の3つのパラグラフ、つまり最初の2頁余りと、そして、最後の1頁足らずのパラグラフだけで、あとの頁はすべて両親にまつわる話になっている。

ということは、読者は「60歳になった著者」というタイトルから当然ウィルソン自身についての話を期待しているのに、実際はそれとは違ったものを

読まされることになる。なんだか、肩すかしを食らったような気分になる。ところが、読み進むにつれて、その気分が必ずしもなくなるわけではないが、それでもウィルソンが描く父親像に徐々に引き込まれていく。父親が偉大であったという理由からではない。父は弁護士で、最後にはニュージャージー州の検事総長まで務めた人だが、ウィルソンは父親を世間的な意味で偉いとは思っていない。むしろ、かなり風変わりな人物として描いている。常軌を逸している (eccentric) 人物として描いている。それが面白くないわけではない。

それがどんなふうに常軌を逸していたか。以下、ウィルソンが描くその両親像を、とりわけ、その父親像を少し詳しく見てみることにする。

## 2.

### 父——その時代、憂鬱症、トラウマ、人生の目的意識の欠如

ウィルソンは父の肖像を描くにあたって、まずその時代から始める。「南北戦争の後の時代、すなわち、ブルジョワ的な俗物根性が横溢し巨富のせいで異様であった時代は、古い伝統で育ったアメリカ人たち——わたしの父やおじたちの世代——には厄介な時代であった」。父は18世紀の古い伝統をもつプリンストン大学で学んだが、「そのような人びとは、学校を出た瞬間から、目もくらむような誘惑や抗しがたい圧力を受け、知らぬ間に目的の変更を迫られることになった。その数はおびただしいものであった。父の大学での親友のうち、父が30代になって残っていたのは一人しかいなかった。残りはすべて死んでいた——なかには自殺したもの者もあった」(214) と、それが若者たちを深刻な精神的不安に陥れた時代であったことを指摘する。

法学部を卒業したウィルソンの父は「古典的な共和制の政治家」を目指して活動をつづけたが、しかし、そのうち、「自分が知悉するような世紀末の政治生活に積極的に参加する気になれなくなって」、「35歳のころ、神経症に罹り、これが段々長引くようになり、対処しがたくなっていった」。「いわゆる憂鬱症で」、「神経衰弱とも呼ばれ」、「アメリカ人の生活のスピードアップ化、

社会的地位は金次第という社会で、金の担い手がたえず交代することから生じる社会的不安、これらがアメリカ人を過重労働と強迫的な不安に駆り立てた」。 (214)

〈強迫観念〉は父の語彙のなかで大きいのしかかってきた言葉の一つだった。当時はまだ精神分析医などはなく、医師は「安静療法」なるものをすすめて、結局、「父はサナトリウムを出たり入ったりして晩年のすべてを過ごしてしまった」。温泉地で、屋外のカフェに座って、ワルツを聴き、ビールをたっぷり飲むといった治療を受けることもあったが、そんな時には父は「快活になり、もはや次々と病んで死んでいくなどと想像しなくなった」 (215) という。

ウィルソンは「父の憂鬱症の一つにはカルヴィン派の地獄落ちに対する恐怖の表れではなかったか」と考えることもあり、また、38歳までしか生きられなかったたった一人の兄が死の床にあったとき、「何もしてやることができなかった——その経験が父にトラウマを残すことになった」 (216) と思うこともあった。

こうして、ウィルソンは父の鬱病の原因として時代や兄の死を挙げるが、それに加えて「もう一つの原因は、人生の目的意識の欠如であった」。

政治的野心は棄てていた。弁護士としてはできうるかぎりの成功を収めていたが、長い目で見ると、法律は父を退屈させた。休業して、サナトリウムやノースカロライナ州の農園に閉じこもることが多くなった。金が底を突きそうだと感じると、隠れ家や逃亡先から出てきて二、三の事件を手がけるが、状況回復のためにはそれだけで十分な仕事だった。 (217)

そんな父が経済的な苦境に陥らなくて済んだのはピカーの弁護士だったからである。しかし、そのために父が自宅で、「強烈な集中力」を払って法廷のための準備をする様子は「部屋のなかを行きつ戻りつし、神経質に階段を上り下りしたので、他の作業はすべて中断されなければならない、その雰囲気はとても耐えられるものではなかった」 (218) という。

## ウッドロー・ウィルソンに対する父の評価

民主党のウッドロー・ウィルソン（1856－1924）は、プリンストン大学の学長を務め、その後、ニュージャージー州知事を経て、28代大統領（1913－21）に就任している。「（共和党員であった）父はウッドロー・ウィルソンがそれほど好きではなかった」。エドマンド・ウィルソンは彼のことを汚いビジネス界に対する挑戦者、政界における知識人改革者として評価していたが、父は早くからその頑迷さと猜疑心に気づいていたという。

州知事時代のウッドロー・ウィルソンは、いかにも彼らしいが、政敵である共和党員の父を困らせるために、共和党の巨大な悪の巣であるアトランティック・シティを捜索するように命じた。「父があえて手をつけることはあるまいと信じてのことだった」。しかし、父がみごとにその仕事をやってのけたときには、深く感銘して、その後大統領に就任すると、次に最高裁に空席ができることがあれば、そのポストに就かせる約束をした。だが、大統領就任中には、その空席は生じなかったという。

父は「生涯にわたって共和党候補以外に投票したことがなかったのに、ウッドロー・ウィルソンが2期目の大統領候補になったときだけはこの原則を曲げて、民主党の候補に投票した。その理由はウィルソンが演説で『わが国は参戦しない』と約束していたからである。しかし、父はその後、大統領がすぐさまわが国を戦争に突入させたときには、自分の行為を悔やんだ」（220）のだった。

## 父の友達と旅行

「父はニュージャージー州の公人としては、けっして株に投資しないという風変わりな——おそらく無二の——人生を送った。株式取引所を賭博場と見なし、賭博を是認しなかった」からである。「（息子の）わたしが大企業をけなすときには、ビジネスマンはわが国の財源を発展させるのに大いに貢献してきたと父は——共和党員としてそれだけは言うておかねばならなかったから——反論したものだが、ビジネスマンには退屈していた」。（222）

ウィルソン親子が住んでいたニュージャージー州の小さな町レッドバンクには、父と「気のあった友はほとんどいず、まして同じレベルの友は皆無だった」。したがって、「おもな愉しみは旅行だった」。「あるとき、わたしをソールトレークシティに連れていったときもいかにも父らしかった。わたしたちはモルモン教の歴史を調べ、『モルモン書』を読もうとすらししたが、これは恐ろしい代物であることがわかった」(222) という。

「父は人種や階級に関して俗物的なところはまったくなかった——母の場合はそうはいかなくて、父の友人の何人かは、自宅に連れてくるのを許そうとはしなかった」。また、父は「黒人とも親しくして、黒人の聴衆に向けて演説をしたことがよくある」。「そして、ブッカー・T・ワシントンのような黒人の立志伝を好んで読んだ」。(222)

父はかなり風変わりな人物を友としていた。たとえば、「父の慈善は多岐にわたり、ときにはかなり奇妙なものもあって」、まったく無名のへば詩人の詩集を買い上げてやった。また、巡業劇団の大根役者を最眞にして、彼がレッドバンクを巡業したときには、1週間に二晩も三晩も劇場に足を運んだのだった。

「レッドバンクで父のお気に入りの仲間には地方新聞の編集をしている社会主義者がいた。母はこの男を夕食に招待することを許さなかったから——彼はわざと流行後れの服を着て、顔も洗わないのだと母は言った——やむをえず父と彼はいっしょに長い散歩をしなければならなかった」。(224)

### リンカーンに対する父の敬愛

「父は異常なほどリンカーンを敬愛していた——共和党に対する父の忠誠は一つにはこのせいだったに違いない。リンカーンに関するすべての資料を収集していたし、『大平民リンカーン』と題する一般向けの演説を好んでした」。ところで、「いったい（父と）リンカーンとの近似はどこにあるのだろうか、わたしは不思議だった」。(226)

「(父は) わたしにはハートン（が書いた『リンカーン伝』）を読ませよ

うとしていた——が、それを読んだのは父が死んでからだった。ハーンドンが描く肖像によって、やっとリンカーンに対する父の大きな関心の理由を見つけることができた。リンカーンは偉大な弁護士であったが、はなはだしい神経症に苦しみながらも鬱病の発作を乗り越えねばならず、この（ハーンドンが描く）肖像によれば、この悪条件にもかかわらず、なんとか自分自身の悪夢と、アメリカ共和国という——いくぶんぼろぼろになった——社会の危機を切り抜けたのだった」。(227)

### 父と母の対立点

「父と母は真っ向から対立する趣味と気質をもっていた。母は〈外交型〉で、ブリッジ、園芸、馬、犬を好んだ。活発で、すばしっこいが、知的な関心はぜんぜんなかった」。「わたしはずっと母の味方だったが、…この場合は、孤独な母に独占された一人っ子の典型的なケースだったのだ。母にはまた、自分が愛する人を支配し言いくるめる衝動が見られた——しかし、父にはそのような本能は皆無だった。父はただ助言するだけで、コントロールしようなどという気はさらさらなかった」。(228)

「父は自分の病気のことでしかしゃべらなかった。医学書を勉強して、一つの恐怖が消えるとすぐに、もっとぞっとするものを見つけてくるのだった。すでに二度手術を受けていたが——両方とも、ほんとうに必要なものだったとわたしは信じているが——困ったことに、今度は内臓を全部除去するというのを思いとどまらせねばならなかった」。(229)

しかし、二人が結婚するときは、「もともと母よりも父のほうが愛していたらしい。結婚の承諾が得られるかどうか怪しかったとき、父は部屋を往ったり来たりしながら、もし自分を受け入れてくれなければ、誰とも結婚しないと誓ったとのことだ」。(229)

### 父と母の関心事——2つの深刻な対立と危機

「父が（病気のせいで）もはや家族の一員と思われぬときに起こったこの



危機の他に、正常なときにですら二人のあいだには関心事の深刻な対立があった。どちらが先だったか憶えていないけれども、二つの大きな危機を」ウィルソンは思い出す。

1つ目の危機はこうであった。

「旅行に関して二人の意見が一致することはけっしてなかった。母は当世風の活気があって陽気なところに行きたがった——が、そういう場所は父には退屈だった。母は自分の好きな地に——頭にあったのはフロリダと思うが——連れて行ってほしいと言ったのに、父はその要求に無関係なヨーロッパ旅行を計画してしまった。母の同意を得ぬままに、あるいは、わたしの知るかぎりでは相談もせず、さっさと計画を進め、乗船切符まで購入した」。そんな父の独断に母は叛旗を翻した。ところが、今度は「これに対する父の受け止め方には驚いた。法廷での弁舌さながらに、これほど自分に面倒をかけさせた後で、気まぐれにもその仕事をぶちこわそうとすると、母を大げさに非難したのだ。まるで母が何か傑作をぶち壊したか、父の全経歴をひっくり返してしまったかのようだった。私生活のどんな場合でも父がこんなふうな話し方をするのを耳にしたことはなかった。有罪を確信してのことだったと思う。密かに進めていた計画を母はだめにしてしまったのだ」。(230)

2つ目の危機は家の新築をめぐるものであった。

「母は…魅力的な敷地を選び、何ヵ月にもわたって建築家と打ち合わせをして、すべてが自分の望み通りであるような新居の計画を立てた。わたしは心からこれに賛成で——家で仕事をしようとするれば、かならずどこかの部屋で起こる何かによって妨げられたし、それに…贅沢な暮らしに鈍感でもなかったから——新しい敷地に期待していた。そんなある晩、夕食を終えたばかりのときに、母は青写真を突きつけた。しかし、父は母に向かって、新しい家を買う余裕がないこと、病気のせいで収入が不安定であること、その計画は忘れるべきであることをはっきりと言った。母には父が本気であることがわかった。そして、悔しさのあまり、父の前で青写真をびりびりと破いてしまった」(232) という。

しかし、やがてウィルソンは母の執念に驚くことになる。父が肺炎で亡くなった直後、「母は小さな泣き声をあげた。が、わたしたちが階下に降りるとすぐに、『これで新しい家を買えるわ!』と言ったのには仰天した。その後、まもなく、最初に計画していた大きさの家ではなかったけれど、母は購入した。わたしはそれを見たとき、父が母の人生をどれほど抑圧してきたかを完全に、そして、はじめて納得した」。(236)

### 「世俗的」な母

そのような母に対してもウィルソンの記述・評価は赤裸々で容赦がない。「母は父のほんとうのものの考え方がどうであったかの、父が公的生活でなぜあのように振舞ったのかを理解していたと、わたしは思ったことがない。父に対する母の尊敬心は、いくぶんかは、他の人びとが抱いていた尊敬心から来ていた。母の価値観はときにははがっくりするほど世俗的であるように思われた。社会的な名声を、そして、金銭も崇拝したのだ」。(234)

「母はわたしに、頭脳的な父とは違って運動選手に——フットボールの選手をしていたスポーツマンの母の弟ようになってほしかったのだ」。(234)

「母には、父の仕事が、ましてわたしの仕事が理解できなかったとわたしは思っている。たとえば、急進的な30年代に、旧友のドス・パソスは…炭鉱夫たちの弾圧に対する抗議運動に参加したために…起訴されたことがある。…そして、次に母と会ったとき、母が『ドス・パソスが逮捕されてよかったわ』と言ったことでわたしはショックを受けた」。また、母は「サッコとヴァンゼッティが死刑に値する『実に恐ろしい人たち』であると信じていたようであるが——これは、母は非常に心の優しい人だったので、人が間違っても処刑されるなどとはとても考えることができなかったせいであると思う」。(235)

こうして、ウィルソンは母の弱点を包み隠さず挙げているが、だからと言って、その長所に目を瞑ってしまっているわけではない。

「母が父を真に評価していた一つの心温まる証拠をわたしに——まったく予期せぬことであったが——与えたのを思い出す。…わたしは、自分が執筆

しているリベラルな週刊誌の方針をめぐって、重要と考える方針の多数決で敗れるかも知れないという懸念を口にしたことがあった。母はすかさず言った。『あなたのお父さんは判事と陪審員が偏見を抱き、一般の人びとの感情がすべて自分に反対であるとわかっているときでも、提訴し、争い、勝利したものです』。(235)

### 3.

#### 父と〈古い石造りの家〉との間のアナロジー

ウィルソンは、このようにして、両親の肖像を、とりわけ、父親の肖像を詳細に描いてくるのだが、最後にそれをまとめるに当たり、またもや唐突に、エッセイ冒頭の3つ目のパラグラフで紹介していた〈古い石造りの家〉を持ち出してくる。ウィルソンによれば、父の肖像と〈古い石造りの家〉の姿とは共通する1つの大きな特徴が見られるというのだ。

父は、間違いなく、例外的な人だった (an exceptional case)。わたしが今、書き物をしているタルコットヴィルのこの家もまったく変則的 (anomaly) な建物である。子どものころは、あまりにも魅力的で、わたしの他の生活とあまりにもかけ離れて見えたので、晩年になっても、実際ここにいないときには、現実存在していることが信じられないくらいだった。現在では、この家がかくも魔法の世界のものと思われる理由のいくらかが理解できる。それは、オネイダ・インディアンとの協定で白人がここに住めるようになった後、この地方が入植のために開拓されつつあった時代に建てられた。(236)

ウィルソンはこの家屋の変則性をさらに強調して、それが母の気に入りの場所でなかったと述べる。

「この家屋は多くの人を住まわせる必要から内装だけでなくその大きさも重視された」。「屋敷が町自体のようであった。それは宿屋であり、役場であり、郵便局であり、社交場であり、物資の供給所であった」。「家は母方の一

族のものだったが、父は母の伯父から母の名義で買い取り、晩年のますます陰鬱な日々をできるかぎりここで過ごした。「母はタルコットヴィルの家などほしくなかった。妙な具合にして、それは二人の意見が一致しない多くのものの一つになってしまった」。「ここは母には気の滅入るところであり、退屈でもあった。母は相変わらず、新しい人びとに会えるところ、大勢の人びとが往き来するところに連れて行ってほしいと言っていた」。(237)

一方、父にはここがお気に入りの場所であった。

「父はニュージャージー州にいる時よりもタルコットヴィルの小規模な共同体にっそう親密な関係を築くことができたように思われる」。「わたしが今ここでリラックスできるのと同じように、父はリラックスした——自分自身の風変わり (his own singularity) な生活だけでなく村の生活にくつろぎ、この孤立した奇妙 (strangeness) な家だけでなく、それが今なお確固として表象する古いアメリカにくつろいだのだった」。(237)

エドマンド・ウィルソンの伝記を書いたジェフリー・マイヤーズはこの家屋のイメージについて「彼 (エドマンド・ウィルソン) 自身と〈古い石造りの家〉との間に感動的なアナロジー」(a moving analogy between himself and the Old Stone House) ③ (372) を見ている。しかし、上のウィルソンの文章から明らかなように、ウィルソンは自分自身というよりも、何よりも父親とこの the Old Stone House との間に類似性を見ているのではないか。父親が exceptional な人であったことと the Old Stone House が anomaly であること、さらには、父の生活が singularity であったことと the Old Stone House が strangeness であることをウィルソンははっきりと述べているからである。言うまでもなく、マイヤーズが述べるウィルソン自身と the Old Stone House とのアナロジーとは、父親とウィルソン自身との間に類似性があって始めて成り立つものなのだ。よってまずその類似性が検討されなければならない。

## 両親の肖像に見え隠れする息子ウィルソン自身の姿

そのためにはもう一度、両親の、とりわけ、父親の肖像を振り返る必要が

ある。そこで、第一に問題となるのは、すでに指摘したように、ウィルソンが「60歳になった著者」のエッセイをほとんど両親の肖像の記述に当てていることである。そして、それはいったいどうしてなのかという疑問である。

そこで注目すべきは、両親の肖像の中に見え隠れするウィルソン自身の姿、すなわち、二人の性格や行動について息子ウィルソンがときどきそれとなく漏らしている批評、あるいは、共感である。それらはウィルソン自身の姿（その仕事、性格、存在）をまさしく映し出すものとなっているからである。しかし、それは両親の肖像（2人の生涯や性格）というコンテキストの中に置くことによって始めて可能である、あるいは、どうしても置かざるをえない、とウィルソンは感じたのではあるまいか。そう感じさせずにおかない意識が彼にはあったのではないか。

たとえば、先に引用したように、ウィルソンは生前父がなぜあれほどリンカーンを敬愛したのかわからなかった。そこで、父が推薦していたハーンドンの『リンカーン伝』を、父の死後読んでみた。そうすることによって始めて父のリンカーンに対する関心の理由が理解できた。というのも、ハーンドンはリンカーンがまだ無名の弁護士であったころの相棒で、鬱病に苦しんでいたといった弱点を含めてもっともリスティックにリンカーンを描いていることをウィルソンは発見したからだ。その結果、ウィルソンは後に67歳で『愛国の血糊』（1962）を完成させたとき、リンカーンについての章を執筆するにあたっては、父の推薦していたハーンドンの伝記にもっぱら依拠し、カール・サンドバーグの描くセンチメンタルなリンカーンの伝記を徹底的に揶揄して斥けることになった。

また、父は共産党員や無政府主義者の目的にはほとんど共感しなかったのに、過激派を令状なしに逮捕したり無差別に追放したりすることに対して義憤を露わにしたことがあった。これに感動したウィルソンは、ヨーロッパにおける社会主義の歴史『フィンランド駆け』（1930）を著したときには頭の中には革命の歴史は詰め込まれていたけれども、「アメリカの正義の原則が何であるかを父から学ぶことが残されていたのだった」と、ここでは漏らすこと

になるのである。

母についても、ウィルソンは、父が鬱病の間はずっと母の味方だったという。ウィルソンはそれを「孤独な母に独占された典型的なケースだった」と自己診断しているが、それは自分が幼いころに、そして、成人になっても、なお「バニー（Bunny）」（ウサギちゃん）という愛称で呼ばれてきたことを意識してに違いない。ウィルソンがペンシルヴェニア州ポツタウンのヒル・スクールに寄宿していたとき、母は訪問してきて、学友たちの前で、彼のことを「バニー」と呼んだ。爾来、彼らはウィルソンをバニー呼ばわりしてからかった。それは、母親が一人っ子の赤ん坊ウィルソンにかわいさのあまり付けた（女の子のための）愛称であったのだ。（大人になったウィルソンを「バニー」と呼ぶ者もあったが、それは彼よりも年輩かよほど親しい間柄に限られていた。そのうちの一人にウラジーミル・ナボコフがいた）。

### 父と自分との類似——父から受け継いだ血統

こうして、ウィルソンは両親の肖像の中に紛れ込んで密かに自己を描いていると言えるのだが、そうすると、父の生涯を次のように結んでいることはなんとしても注目されねばならない。

父の経歴には悲劇的な側面があった——父は61歳で亡くなった。わたしの方がある点では幸運である——わたしはこれを62歳で書いている。父は、フェルトで防音したドア、真の友人の欠如、サナトリウムへの避難といった犠牲を払ったとはいえ、1880年から1920年までのあの時期を優等生として乗り越えてきたのだ！（235）

ウィルソンは自分の方が長生きをして幸運であるという。しかし、それだからといって、その父の世代よりも自分の世代がよかったかというとは必ずしもそうでない。自分の世代にも同じような犠牲者があったという。

われわれは生まれた時代の物質主義や道徳的堅苦しさを退けて、自由にアメリカの生活をつくりなおし、父親たちよりももっと楽しむべきだと考

えていた。しかし、われわれの時代にも犠牲者が生まれた。わたしの友人で狂った者、死んだ者、あるいは、カトリックに改宗した者の数はあまりにも多い…自殺した者も二人いた。(235)

ウィルソンの時代は、父の時代、すなわち、「父の大学での親友のうち、父が30代になって残っていたのは一人しかいなかった。残りはすべて死んでいた——なかには自殺したもの者もあった」という時代とそっくりではないか。そして、ウィルソン自身も時代の犠牲者となり、父と同じ病気を患うことになる。

わたし自身は30代半ばに、まったく予期しなかった神経衰弱に陥った。わたしは父がはじめて陰の生活に入ったときの年齢にまさしく達したのだという指摘を受けた。父から神経症の血統をいくぶん受け継いだにちがいない。そして、同じ運命をたどるのではないかという無意識の恐怖に影響されていたのかもしれない。(235)

#### 4.

#### 父の肖像は自分の肖像——“the sense of my continuity”の〈拡大〉

こうして、ウィルソンは、父の時代と自分の時代が類似していることを、それどころか、自分が父から神経症の血統をも受け継いでいることすらも、指摘するのである。ここまでくると、ウィルソンが「60歳になった著者」と題するエッセイでなぜこれほど長々と両親の、とりわけ、父親のことを書いたかの理由はもはや明らかである。ウィルソンはそうすることによって、自分自身のことを語ろうとしたのである。つまり、父は自分であり、父の時代は自分の時代なのだ。2つのものは類似と言うよりも継続そのものなのだ。

そして、父から受け継いだ大きなものの1つに神経症がある。それについてウィルソンは次のように述べている。

(わたしの神経症は)何年たってもなかなか完全に回復しなかったが、

自分が人生70年の半分を生きてきて「今、ホームストレッチにいるんだ」——この言葉は自分を励ますためによく使った——と考えてうれしくなることがしばしばあった。しかし、思っていたよりも長く生きた今となつては、自分がこのまま生きつづけたいと願っているのも確かだ。(235-6)

「思っていたよりも長く生きた今となつては、自分がこのまま生きつづけたいと願っている」というのは、冒頭で指摘したように、60歳を迎えたときにウィルソンが持ったという「自分が継続しているという意識」(the sense of my continuity) からくる願望に他ならない。つまり、ウィルソンは自分という一つの生命を一つの〈個体〉として生き延びさせたいと願望しているのである。

しかし、それと同時に、上に述べたように、父と自分は、そして、父の時代と自分の時代は類似・継続しているならば、自分という存在は父の世代から、さらにもっともっと前の世代から、(生物学の用語で言うならば)〈系統〉として形作られ継続されてきたものである、という意識もそこにはまた働いているはずである。ウィルソンの「自分自身が継続しているという意識」は〈個体〉の概念から〈系統〉の概念に発展しているとも言える。つまり、その意識は〈拡大〉されているのだ。

1962年、67歳になったウィルソンは大著『愛国の血糊——南北戦争の文学研究』(*Patriotic Gore — Studies in the Literature of the American Civil War*)を発表する。ここで、ウィルソンは、アメリカ国民にとって一種のトラウマとなっている南北戦争においてそれに関わった先人たちが残した記録や文学からアメリカ国民の精神を辿ろうとした。彼にこの仕事をさせた何よりも動機は、60歳に抱いたこの〈拡大〉された“the sense of my continuity”ではなかったか。これは『愛国の血糊』執筆の動機に関する1つの仮説と考えられてよい。

マイヤーズのアナロジーの成立——“the sense of my continuity”の〈さらなる拡大〉



こうして、ウィルソンの父はウィルソン自身であることが理解されたからには、マイヤーズがいうところの「the Old Stone House とウィルソン自身との間のアナロジー」もめでたく成立することになる。次いで、マイヤーズは、そのアナロジーのなかで、「ウィルソンはアメリカ社会における自分の立場を特有の背景のなかに建っている〈古い石造りの家〉になぞらえた」(he compared his place in American society to the house in its setting) (372) と述べる。

これは次に引用するウィルソンの言葉を踏まえてに違いない。

これ (the Old Stone House) は、ある意味でずっと取り残されてきたのだ。そして、思うに、わたしも取り残された人間ではないか？ たえば、わたしは雑誌『ライフ』に目を通して、自分がそこに描かれている国の人間ではない、その国に住んでもいないような感じがしてくる。(239)

なるほど、ここまでの引用だけなら、マイヤーズの言う通りで、ウィルソンがエッセイ冒頭の「アメリカ人として自分がどうやら18世紀の人間である——ともかく19世紀初頭からそれほど進歩していない人間である」と述べたことの繰り返しである。それゆえ、マイヤーズは「この最終章（このエッセイ）はこの書物の歴史的・個人的テーマを、つまり、現在における過去の力を強調した」(This final chapter emphasized the historical and personal theme of the book: the force of the past in the present) (372) と結論している。が、はたしてそれだけで済まされていいものだろうか。

ウィルソンが上の引用の文に続けて、急いで付け加えているのを無視してはならない。

それだからと言って、まるでポケットに入れられたようにして、わたしは過去に完全に支配されてしまっているのだろうか？ かならずしもそうとは思わない。わたしはここにいて自分がものごとの中心に——中心は頭のなかにしかないの——存在していると考えることができる。そして、わたしの感情や思いは多くの人たちも共有できると思われるのだ。(239)

ウィルソンは自分が過去の世代から継続したものであることは認めても、それだからと言って、「過去というポケット入れられてしまっている…のだろうか？」(Am I, then, in a pocket of the past?)と過去だけに支配されているという意識には疑問を呈しているのだ。そして、「かならずしもそうとは思わない」(I do not necessarily believe it.)とそれを否定している。その理由は、「わたしはここにいると自分がものごとの中心に…存在していると考えることができる」(I may find myself here at the center of things.)からである。文中の「ものごと」(things)とは特定されていないが、それらは空間におけるさまざまなものであると同時に、ここでは、これまでの文脈を受けて、時間軸（言い換えれば、世代）におけるさまざまなもの、すなわち、過去のもの、現在のもの、未来のものを想定したいのである。そして、その中心 (at the center) にわたし（ウィルソン）がいるのだ。そうすると、引用最後の文「わたしの感情や思いは多くの人たちも共有できると思われる」(my feelings and thoughts may be shared by many)における「多くの人たち」(many)とは、単に過去の世代や同世代の人たちだけでなく将来の世代の人たちも含まれなくてはなるまい。ウィルソンのいう“the sense of my continuity”はそれほどまでに拡大された、つまり、〈さらなる拡大〉をされたと考えることのできる意識でもあるのだ。

## 注

- ① Edmund Wilson, *A Piece of My Mind — Reflections at Sixty*, Farrar, Straus and Giroux, 1956. 以下、本書からの引用は括弧内に頁数を示す。なお、文学事典などの記述に見られる邦題『わが心の断片』は必ずしも適切ではない。“Give a person a piece of one's mind”で「人に遠慮なく言う、直言する、しかりつける、たしなめる」の意。「わが心の断片」ではそのニュアンスが読み取れない。
- ② ウィルソンは36歳のときに『アクセルの城』(1931)を、45歳のときに『フィンランド駅へ』(1940)を発表した。前者は象徴主義文学についての、後者はロシア革命にいたる道についての著作であるが、いずれも同時代ないしはその直前のヨーロッパでの出来事を扱っている。しかるに、67歳で発表した『愛国の血潮』(1962)では、自国での百年前の戦争について論じた。これは、ここでのウィルソン60歳のときの心境 old

fogeyism とも関係がありそうだが、それについてはまたの機会に考えたい。

- ③ Jeffrey Meyers, *Edmund Wilson, A Biography*, Houghton Mifflin Company, 1995. 以下、本書からの引用は括弧内に頁数を示す。